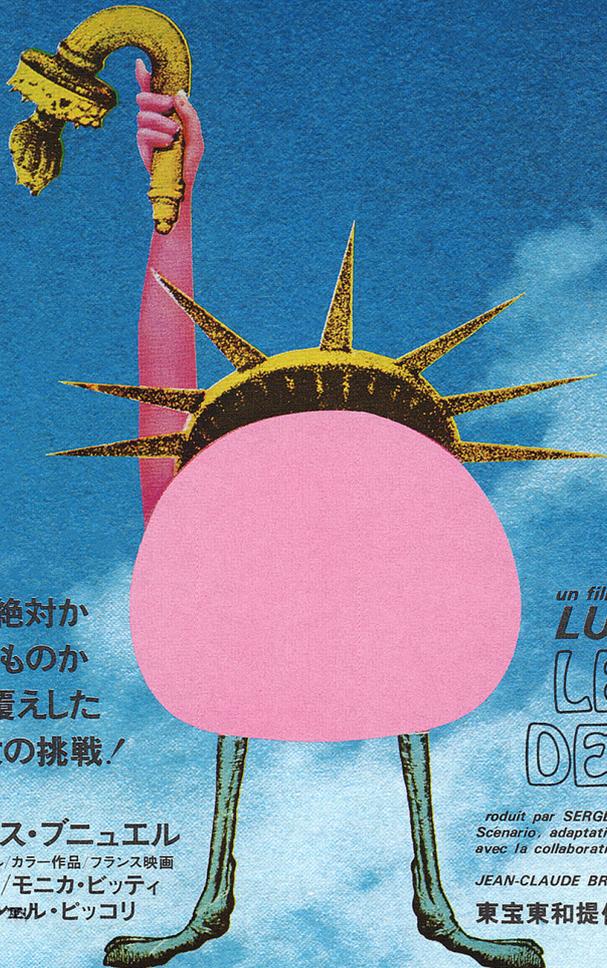
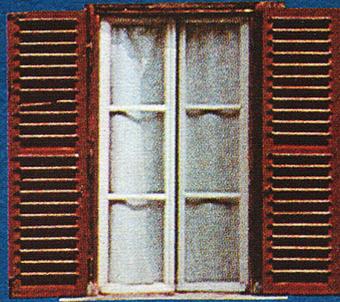


自由の幻想



われわれの感覚は絶対か
われわれの理性は永劫のものか
人間のゆるぎない自信を覆えた
鬼才ブニュエル最大の挑戦!

監督・脚本ルイス・ブニュエル
協力ジャン・クロード・カリエール/カラー作品/フランス映画
ジャン・クロード・ブリアリ/モニカ・ビッティ
パスカル・オードレー/ミシェル・ピッコリ

un film de
LUIS BUNUEL
**LE FANTOME
DE LA LIBERTE**

produit par SERGE SILBERMAN
Scénario, adaptation et dialogues LUIS BUNUEL
avec la collaboration de JEAN-CLAUDE CARRIERE

JEAN-CLAUDE BRIALY MONICA VITTI MICHEL PICCOLI

東宝東和提供 



幻

「看護婦は途中、一軒の宿屋に泊まった。同宿の客はフランススコ派の修道僧の一行。夜半、老婦人と若い男の二人連れが入ってきた。駈落ちらしい叔母と甥という二人は愛を確かめあおうという。向かいの部屋には帽子屋が若者を招く。ついで看護婦、修道僧たちも。と、突然、帽子屋がむき出しの尻を

連れの女に鞭打たせているではないか！
朝早く宿を発った看護婦は泊り客の一人の教授を車に乗せ、町へ向かう。彼は憲兵隊本部で「法の観念と権威」について講義を始めるが、つぎつぎと事件がおこり、憲兵たちは出動を命ぜられて教室

自

「ルイス・ブニエルの『自分の作品には、意識的な、いかなるシンボルもない』と言っているが、その傾向は近年ますます強まってきたようだ。前作『ブルジョワジーの秘かな愉しみ』では、食べること」が明確にテーマとして提起され、登場人物たちも終始一貫しており、観る側の解釈を容易にするだけの要素を含んでいたが、こんどの「自由の幻想」では、それがまったく無視されている。これはいいかえれば、ブニエルの「こんど私は完全に自由な映画を作るつもりだ」と語ったことばを裏書きするものである。ひとつの事件もしくはエピソードと次のそれとが結びつくのはあくまでも偶然であって、そのエピソードはすべて非日常的であり、不条理の世界にとどまっている。観客にわれわれは、自分たちの存在感を根底から揺さぶられ、価値感に自

信を失う。しかもブニエルの語り口は軽快かつ苦しい。
●出演は「黒衣の花嫁」のジャン・クロード・ブリアリ、わが国には久しぶりにお目見えのモニカ・ビッティとパスカレ・オードレ、「相続人」のジャン・ロシュフォール、それにブニエル作品には欠かせないミシエル・ピッコリらを始めとするおなじみの面々。
シナリオはブニエルとコンピを組み「昼顔」「ブルジョワジーの秘かな愉しみ」のジャン・クロード・カリエール。撮影もやはり同じスタッフ仲間ブニエル作品の多いエドモン・リシャルが担当している。

想

「内は一人もいなくなってしまう。教授が話した「習俗の變化」の例は、自分が妻と友人の家に招待されたときのことだ。教授夫妻が一家と共にテーブルにつくが、その椅子は便器。教授が中座して小部屋に入るとそこが食事をする場所になっている。ノックをするとすかさず「入りますよ！」
スピード違反の男(ジャン・ロシュフォール)がつかまった。しかも一人娘が行方不明になり、当の娘を連れて警察に行き、特徴を書きとらせる。ただちに捜査開始。無差別殺人犯が有罪になり、手錠を外され、検事から祝福される。死んだ妹の墓所を確かめる警視総監(ジュリアン・ベルト)が逮捕され、もう一人の総監(ミシエル・ピッコリ)に対面する。動物園を出た二人の総監の耳に、あの、スペイン市民の「くたばれ、自由！」の叫びが……。

「くたばれ、自由！」の叫びが……。

由



「一八〇八年。ナポレオン占領下のスペインのトレド。抵抗するスペイン人たちの処刑が手ざわよく行なわれている。「くたばれ、自由！」と叫んで死んでゆく人びと。が、それはいつの間にか、現代のパリの静かな公園の片隅で一人の乳母の読む本の一筋になつてゐる。少女が見知らぬ紳士から写真を貰った。「おとなに見せてはだめだよ」といわれたものの、少女は母(モニカ・ビッティ)にそれを見せる。一目見るなり彼女は「いやらしい！」と夫(ジャン・クロード・ブリアリ)に訴える。確かにそれはいやらしいが真実を伝えている。サクレ・クール寺院、凱旋門、etc……。その夜、彼は寝つかれぬまま、次々とふしぎな光景を目撃する。翌朝、彼は病院に行くが信用されない。と、そこへ、看護婦が父の病気を理由に休暇を願い出た。

の

「アンダレシアの犬」黄金時代に続き1932年ブニエルが故郷スペインで撮影した文化地誌的な映画エッセー。完成直後上映禁止の運命にあい、初公開(パリ)は1937年にもちこされた。日本初公開。文明が美しく発展したヨーロッパの都市の、僅か100キロわきに、原始のままの生存闘争を刻々つけ、残酷な日々を生きる人々の村がある。直視しえない光景。死と背中あわせの日常。そこで聖者に救いを求める人々。だが、聖者というなら、この人々こそ聖者のようだ。

〔同時上映〕ブニエルのシネマ・エッセイ

糧なき土地



監督・脚本・編集……L・ブニエル
撮影……エリ・ロタール
コメンタリー……ピエール・ユニック
朗読……アベル・ジャカン
音楽……ブラムス「第四交響曲」
ピエール・ブロンベルジュ提供
フランス映画社配給

11月19日(土)より
ロードショー
22日・29日の夜の回は休映

神田/神保町交差点/岩波ビル10階
地下鉄(都営6号線)神保町下車・国電(中央線)水道橋下車

岩波ホール (262) 5252

●お得な特別ご観賞券 ¥900 発売中!
(当日は¥1,200のところ)

〔発売所〕岩波ホール(1階)チケットガイドまたは都内各プレイガイド
団体のお申込み・お問合わせは東宝東和渉外係(562)0111へ
入替制・自由定員制